

「ドン・ジョヴァンニ」と権力関係

小 川 賢 治

目 次

はじめに

第1部 オペラ「ドン・ジョヴァンニ」について

- 1 登場人物
- 2 あらすじ
- 3 ドン・ジョヴァンニの放蕩性
- 4 ドン・ジョヴァンニとツェルリーナ等との権力関係
- 5 ドン・ジョヴァンニとツェルリーナ等の間に権力関係がない

演出

- 6 ドン・ジョヴァンニが地獄落ちのあと再登場する演出

第2部 「ドン・ジョヴァンニ」の、種々の権力関係による演出

- 1 男性管理職と非正規女性社員
- 2 テレビ局プロデューサーと新人女性歌手
- 3 政権党の一員の議員と駆け出しの女性新聞記者
- 4 女性上司と男性部下
- 5 米軍基地兵士と県民女性
- 6 かつての戦勝国と敗戦国を擬人化した存在の間の権力関係

おわりに

はじめに

本稿は、モーツァルトのオペラ「ドン・ジョヴァンニ」のもつ様々な内容のうち、特に、騎士階級と平民階級の力関係に着目して、その「ドン・ジョヴァンニ」のストーリーが、他の時代・社会における力関係の場合であれば、どのように展開するか、どのような演出が可能であるか、を考察する試みである。

「ドン・ジョヴァンニ」では、主人公ドン・ジョヴァンニは騎士階級に属している。彼は放蕩の限りを尽くすが、そのために騎士という立場を利用して目的を達成する場合がある。ドン・ジョヴァンニは、これから結婚式を挙げようとしている農民のツェルリーナという女性を誘惑する場面において騎士階級の地位を利用している。

現代社会の様々な力関係の場合に「ドン・ジョヴァンニ」の話がどのような展開をたどるかを第2部において考察するのだが、そのために、次の各々の場合を取り上げる。

- ・男性管理職と非正規女性社員
- ・テレビ局プロデューサーと新人女性歌手
- ・政権党の一員の議員と駆け出しの女性新聞記者
- ・女性上司と男性部下
- ・米軍基地兵士と県民女性
- ・かつての戦勝国と敗戦国を擬人化した存在の間の権力関係

それぞれの場合に「ドン・ジョヴァンニ」の話がどのように展開するかを考察することになる。

第1部 オペラ「ドン・ジョヴァンニ」について

モーツァルトのオペラ「ドン・ジョヴァンニ Don Giovanni」は、正式名称を「罰を受けた放蕩者あるいはドン・ジョヴァンニ」と言うが、初演時のプログラムでは次のように説明されている。

2 幕の Drama Giocoso(喜歌劇…注)

台本はウィーン帝室劇場の台本作者 Da Ponte 師

音楽はドイツ人楽長の Wolfgang Mozart 氏

作曲されたのは1787年

初演は1787年10月29日、プラハの Nostitz 伯国立劇場において、作曲者の指揮による

舞台はスペインのある町

注：drama giocoso(あるいはopera giocoso)は「喜歌劇」と訳されることがある。歴史的な事実に基づいた opera seria と対比して、喜劇的な要素をも持った作品に用いられる用語・分類である。

「ドン・ジョヴァンニ」は、モーツァルト最晩年のいくつかのオペラの一つである。内容は、スペインの有名な放蕩者であるドン・ファンを主人公に置いたもので、ドン・ファン(イタリア語ではドン・ジョヴァンニ)の様々な放蕩ぶりが描かれるが、オペラの最後では、悪行を断罪されるかのように、地獄に引きずり込まれる。

1 登場人物

登場人物は、プラハ初演版のプログラムでは次のように説明されている。

ドン・ジョヴァンニ Don Giovanni(この上なく放蕩者の若い騎士)

ドンナ・アンナ Donna Anna(ドン・オッターヴィオの許嫁の貴婦人)

ドン・オッターヴィオ Don Ottavio

騎士長 Commendatore

ドンナ・エルヴィーラ Donna Elvira(ドン・ジョヴァンニに捨てられたブルゴス出身の貴婦人)

レボレロ Leporello(ドン・ジョヴァンニの従者)

マゼット Masetto(ツェルリーナの恋人)

ツェルリーナ Zerlina(農民の娘)

説明の書かれていないものでは、ドン・オッターヴィオは騎士階級の一員であり、騎士長はドンナ・アンナの父である。

2 あらすじ

(本稿のテーマに直接かかわる部分を中心にあらすじを記す。)

(第1幕第1場) 女性と男性が建物から飛び出してくる。女性はドンナ・アンナ。男性はドン・ジョヴァンニであるが、この時点では誰か分からないことになっている。ドンナ・アンナは、男が自分の部屋に忍び込み、危うく襲われるところをかりうじて逃れた、と語り、この男を非難する。

騒ぎを聞きつけたドンナ・アンナの父、騎士長が現れて、ドン・ジョヴァンニに闘いを挑んだが、騎士長は殺される。

舞台から退いていたドンナ・アンナが許婚であるドン・オッターヴィオを伴って再登場し、父の殺された姿を見て、ドン・オッターヴィオに復讐を誓わせる。

(第1幕第5場) ドン・ジョヴァンニに捨てられたという女性、ドンナ・エルヴィーラが登場し、恨みの気持ちを述べながらも復縁を願う思いを切々と訴える。

ドン・ジョヴァンニの従者レポレロはドンナ・エルヴィーラに、一夜の情事の後で気まぐれに捨てられたのはあなただけではないと慰めようとする。そのことは「カタログの歌」と呼ばれるアリアで歌われる(次節で歌詞を掲げる)。

(第1幕第7場から第9場) 町の広場に、これから結婚式を挙げようとしている農夫のマゼットと農婦のツェルリーナがいて、祝いに駆けつけた農夫仲間也大勢集っている。そこへドン・ジョヴァンニが登場し、ツェルリーナに、自分と結婚しようと誘いをかける。農夫たちは身分の違う騎士には逆らえず、マゼットは追い払われる。

ツェルリーナがドン・ジョヴァンニの誘いを直ちには断れない理由は、ドン・ジョヴァンニが騎士階級の一員であり、社会あるいは政治において大きな力を持っているからである。農民は騎士の命令に反抗できないという意識を持っている。このことは、ドン・ジョヴァンニとツェルリーナの二重唱の中に歌われていて、ドン・ジョヴァンニの誘いを断れないツェルリーナの心情が現れている(4節でその歌詞を掲げる)。

(第1幕第11場から第13場) ドンナ・アンナとドン・オッターヴィオ、次いで、ドンナ・エルヴィーラが登場し、ドン・ジョヴァンニと出会う。話が交わされた結果、その声からドンナ・アンナは、オペラ冒頭で自分の部屋に忍び込んだ男がドン・ジョヴァンニであったことに気付く。

(第2幕第11場, 第15場) 第1幕冒頭でドン・ジョヴァンニに殺された騎士長の石像がドン・ジョヴァンニのもとへやって来る。ドン・ジョヴァンニが騎士長を食事に招くと、騎士長もお返しに食事に招きたいので、この世とは異なる自分の世界へ来るようにと誘う。レポレロは恐れおののいてドン・ジョヴァンニに、断るよう訴えるが、ドン・ジョヴァンニは騎士長の誘いに応じ、彼に導かれて地の底に引きずり込まれていく。

(第2幕最後の場) ドン・ジョヴァンニ以外の全員が登場し、ドン・ジョヴァンニの悪行を非難しつつ、各人が今後の生き方を語ってオペラが終わる。(演出によっては、その場面に、死んだはずのドン・ジョヴァンニが現れる。)

3 ドン・ジョヴァンニの放蕩性

ドン・ジョヴァンニの放蕩性を第1幕第5場の「カタログの歌」の歌詞に見る。ここにおける「カタログ」とは、ドン・ジョヴァンニが相手にした女性のことを従者レポレロが書き付けた目録(リスト)のことである。この歌はドン・ジョヴァンニの放蕩ぶりをよく表している。初めて聴いた時は、公衆が集う劇場において、このようなあからさまな内容の歌を歌っているのかという疑問をもつ人もいるかもしれない。(以下の訳詞は海老沢敏のものを参考にして訳出した。海老沢訳は『名作オペラブックス 21 モーツァルト ドン・ジョヴァンニ』(1988年、音楽之友社)所収。)

「カタログの歌」

あなたは最初の女でもないし、最後の女でもありません。
かつてそうだったし、これからもそうです。
ご覧なさい。この小さくはない手帳には、
彼の女たちの名前がいっぱい詰まっています。
どの町、どの村、どの国も、
彼の女性漁りの証人なのです。

奥様、これが目録です。
私の旦那が愛した女たちの、
この私が作った目録なんです。
ご覧なさい。私と一緒に読みください。

イタリアでは640人、
ドイツでは231人、
フランスで100人、トルコで91人。
だが、スペインではもう1003人。

その中には田舎娘もいれば、
下女もいるし、都会の女もいます。
伯爵夫人、男爵夫人もいれば、
侯爵令嬢、王女様もいます。
あらゆる身分のご婦人、
あらゆる姿形、あらゆる年齢のご婦人がいます。

金髪の女には旦那はいつでも、
やさしさを褒め称えるのが常なのです。
栗色の髪の女には変わらぬ操を、
銀色の髪の女には親切な態度を。
冬には太った女をお望みだし、
夏には痩せた女をお好みです。
大柄な女は威厳があるし、
小柄な女はいつも可愛らしい。

年取った女たちを征服するのは、
リストに載せる楽しみのため。
でも、彼が何より熱中するのは、
若く初々しい女の子。

金持ちの女だろうが、
醜くかろうが、美人だろうが、わがままは言わぬ。

スカートさえはいていれば、
彼が何をするか、わかるでしょう？

「カタログの歌」はドン・ジョヴァンニの放蕩ぶりを従者レポレロが語る歌だが、放蕩ぶりをドン・ジョヴァンニ本人も歌っている。第1幕第15場で、女性たちを自分の屋敷に集めて酒を振る舞えとレポレロに命じている場面で歌われる歌で、普通、「シャンパンの歌」と呼ばれている。

「シャンパンの歌」

まことに気がかりなのは、
あの百姓女たちだ。
夜になるまで彼女たちを楽しませてやりたい、
酒で頭がかあとなるまで。
大宴会を準備するのだ。

広場で娘を見つけたら
連れてこい。
羽目を外して踊るのだ。
メヌエットだろうが、
ラ・フォリーアだろうが、
ドイツ舞曲だろうが、
踊らせるのだ。
わしはその間に
別の歌で、この女、あの女と
恋の遊びをしたいのだ。
ああ、わしのリストは
明日の朝には

10人もの女を
加えることになるぞ。

ドン・ジョヴァンニは自らもこのように歌っているが、他方、放蕩と言われることに対して、第2幕第1場で自らの考えを次のように語っている。

すべてが愛情なのだ。
たった一人の女にだけ尽くしている男は、
他の女たちには無慈悲だ。
わしは自分の心の中に、
とても広い気持ちを感じているので、
全ての女が好きなのだ。
それなのに女たちは、考える力がないので、
わしの善良な性格をペテンと呼ぶのだ。

4 ドン・ジョヴァンニとツェルリーナ等との権力関係

本稿はドン・ジョヴァンニが騎士という立場を利用して女性を誘惑する、その権力関係に焦点を当てているが、社会的な権力をもつ者に誘惑された女性が拒否できない心情を、農民の娘ツェルリーナがドン・ジョヴァンニと歌う二重唱がよく表している。ドン・ジョヴァンニがツェルリーナに、一緒に自分の別荘へ行こうと誘う時に歌われる二重唱である(第1幕第9場)。その歌詞を掲げる。

DG(ドン・ジョヴァンニ)：あそこでわしに手を差し出して、
いいわと言うのだ。
ごらん、すぐそこだよ。
行こう、いとしい人よ、ここを立ち去って。

Z(ツェルリーナ)：行きたいような、行きたくないような。

心臓がちょっとドキドキするわ。
本当に幸せになれそうだよ。
でも、まだだまされているのかも。

DG：おいで、わしの可愛い人よ。

Z：マゼットが可哀そうだよ。

DG：おまえの運命をわしに変えてあげよう。

Z：わたしそんなに頑張れないわ。

DG：行こう、行こう！

Z：行きましょう！

(曲調が快活になって)

DGとZ(2人)：行きましょう(行こう)、行きましょう(行こう)、愛しい人よ。

けがれない愛の苦しみの

埋め合わせをするために！

(抱き合いながら、ドン・ジョヴァンニの別荘の方へ行こうとする)

騎士の立場が強いことは、ドン・ジョヴァンニがツェルリーナを連れていこうとするのを、ツェルリーナの結婚相手であるマゼットが、拒否できないことを悔しがつて歌う歌(第1幕第8場)の歌詞にも現れている。

分かりましたよ、お殿様、
頭を下げて、引き下がらしましょう。

それであなただけが喜ぶのなら。

もうこれ以上、口答えはしません。

あなたは騎士なのだから、

ぼくには断じて疑うなんてできません。

そのことはご親切なお気持ちが語ってくれますよ、

ぼくのためにお持ちくださるそのお気持ちが。

(ツェルリーナに傍白)

悪い娘だ、油断のならない女だ、
いつもぼくをひどい目に合わせてきたんだ。

(宴会に連れていこうとするレボレロに)

行こう、行こう。

(ツェルリーナに)

ここにいろ、ここにいろ。
こりゃほんとに操正しいってことだ。
ぼくたちの騎士様が
おまえを女騎士にしてくれるだろう！

注：本稿では、地位を利用して女性を誘惑しようとする権力関係に焦点を当てているので、ツェルリーナは、有力な騎士のドン・ジョヴァンニの言うことに逆らえない、という面を取り上げているが、他面、ツェルリーナは、単に、強制されて同意した、という側面だけではなく、彼女自身の、良くいえば好奇心の強さ、悪く言えば浮ついた心、という性格、あるいは、地位の高い男と結婚したいという願望が関わっている。このことは上のマゼットの語る言葉の後半にも現れているが、稿末の補注2で今少し詳しく述べる。ただ、言うまでもなく、批判されるべきなのは、ツェルリーナではなく、地位を利用するドン・ジョヴァンニである。

5 ドン・ジョヴァンニとツェルリーナ等の間に権力関係がない演出

本稿ではドン・ジョヴァンニとツェルリーナの間の権力関係に焦点を当てているが、種々の演出の中には権力関係を描かないものもある。その典型的な例が、1990年に Peter Sellars の演出によって上演された「ドン・ジョヴァンニ」である。この上演は、それまでの演出と全く違っていて、

驚きをもって迎えられた。現代のアメリカの街を舞台にし、ドン・ジョヴァンニは貴族ではなく、麻薬中毒のゴロツキという設定である。この演出では、ドン・ジョヴァンニとツェルリーナの間には社会的な地位に伴う力関係はないという点も、多くの演出と異なるところである。以下に、この演出におけるストーリーの展開を記す。

注：この上演は以下の人々によって行われている。

指揮：Craig Smith

演出：Peter Sellars

ドン・ジョヴァンニ：Eugene Perry

レポレロ：Herbert Perry

ドンナ・アンナ：Dominique Labelle

騎士長：James Patterson

ドン・オッターヴィオ：Carroll Freeman

ドンナ・エルヴィーラ：Lorraine Hunt

ツェルリーナ：Ai Lan Zhu

マゼット：Elmore James

合唱：Arnold-Schoenberg Chor

管弦楽：Wiener Symphoniker

序曲演奏時に流される映像は、現代アメリカの大都市の荒廃した一角。崩れた建物、人が居住しなくなった建物が映される。空き地にはゴミが散乱し、風が吹くとゴミが舞い上がって飛んで行く。ネズミの死骸も転がっている。イヌがエサを漁っている。

レポレロは黒人、革ジャンパーを着ている。ドン・ジョヴァンニのことを日本語字幕では「兄貴」と呼んでいる（騎士と従者という関係ではない）。

ドンナ・アンナとドン・ジョヴァンニが建物から飛び出して来る。ドンナ・アンナはアメリカのピンナップによく見られるような肉感的な白人女

性。ドン・ジョヴァンニは、レポレロと同様に革ジャンパー、ジーンズ姿の黒人。

ドンナ・アンナの父(騎士長)はタキシードを着て黒い蝶ネクタイを着け、白い長いマフラーを身につけた紳士で、のちに警察署長であることが判る。ドン・ジョヴァンニに詰め寄るが、ドン・ジョヴァンニは持っていたピストルで一発で騎士長を殺す。

ドンナ・アンナとともに、ドン・オッターヴィオも登場する。彼は警官の出で立ちで、アンナの父(騎士長)のことを「ボス」と呼ぶ。なお、名前は全員、日本語字幕では「ドン(ドンナ)」を取って「アンナ」などどされている。

レポレロはドン・ジョヴァンニを諷めようとして「本物のゴロツキ」になってしまうと言っている。

ドン・ジョヴァンニは、ツェルリーナと出会った後、彼女からマゼットを引き離すためにピストルを持ち出す。

ドン・ジョヴァンニは、レポレロに、他の女を連れてこいと言いながら、自分の腕に麻薬の注射をうつ。

第1幕最後のパーティーの場面は、ビルの間の空き地でおこなわれ、食べ物、今の日本であればコンビニで売られているような食品が登場する。ここでも、ドン・ジョヴァンニはマゼットとツェルリーナを脅かしながら、ツェルリーナを連れ出そうとするが、失敗する。

第2幕冒頭、ドン・ジョヴァンニはレポレロとマリファナを吸引している。

アンナは父を殺されて以来、オッターヴィオとの仲がうまく行っていないようで苛立っているが、このシーンでアンナは自らの腕に麻薬を注射している。

最後の食事の場面。豪華な晩餐ではなく、食べ物はハンバーガー、鶏肉はナゲット。音楽はラジカセを使っている。空き地の一角に埋葬してあつ

たはずの騎士長(警察署長)の棺が動き出す。騎士長の石像の代わりに幼い少女が登場し、彼女に誘われて、ドン・ジョヴァンニは地面の下に引きずり込まれる。

6 ドン・ジョヴァンニが地獄落ちのあと再登場する演出

「ドン・ジョヴァンニ」の通常の演出では、最後にドン・ジョヴァンニが地獄に引きずり込まれた後、残りの出演者たちが、ドン・ジョヴァンニの悪行を非難しつつ、これからの自分の人生を歌って終わるが、そのような演出と異なって、残りの出演者たちが歌っている場面で、地獄に引きずり込まれたはずのドン・ジョヴァンニが再登場するという演出がある。本稿の主題であるドン・ジョヴァンニにまつわる権力関係とは直接には関わりのない事柄であるが、第2部での考察に関係してくるので、ここでこれに触れる。

6—1 このような演出にどのような意図があるのかについては次のような解釈が可能であろう。

1. 性=生。ドン・ジョヴァンニは放蕩の限りを尽くしているが、性こそが人間の生きるといふことの本質だ、という思想があるとする、そのような思想においては、放蕩によって死に至らしめられることは全く理不尽なことであり、ドン・ジョヴァンニは一旦死んだかと思われても実は死んではないということにされる。

この解釈を支持する根拠となりうる可能性があるのは、このオペラの最後で、ドン・ジョヴァンニが地獄落ちしたあと、彼以外の6人全てによって歌われる次の歌詞である。

これが悪人の最期だ。
そして不実な者たちの死は
いつも生と同じものなのだ！

2. 二つ目の解釈は1よりも即物的であるが、ドン・ジョヴァンニは、ドンナ・アンナの父親を殺したこと 등으로、自分にとって不都合なことがあまりにも多いので、この状況から逃げ出すために、レポレロと仕組んで、死んだことにした、という解釈である。死んだことにして、他の人たちがドン・ジョヴァンニの罪を問うことを諦めさせようとしているのだ、ということである。

この解釈を支持するのは、第2幕第14場で、騎士長の石像が現れてドン・ジョヴァンニを地獄に引きずり込んだ、という場面に居合わせたのはドン・ジョヴァンニとレポレロだけであったという事実である(ただ、石像が現れる場面の前で、ドンナ・エルヴィーラは、舞台から一度退場した後、もう一度登場し、「ああ」という叫び声を発して、別の方へ逃げていく、というシーンがあり、これによって、ドンナ・エルヴィーラは石像が来るところを見た、という解釈が通常はなされている。しかし、彼女が石像を見たのかどうか明示はされていない)。

3. この解釈は2の変形であるが、ドン・ジョヴァンニは実はドンナ・アンナと恋愛関係になっていて、ドンナ・アンナが許婚のドン・オッターヴィオから逃れて、異国の地でドン・ジョヴァンニと結婚するために、ドン・ジョヴァンニは死んだことにして、ドンナ・アンナはそのあとを追う、という解釈である。この解釈は、ドンナ・アンナは許婚ドン・オッターヴィオとの関係が上手く行っていないように見え、最後には、結婚するのを1年間待ってほしいと求めるのとも辻褄が合う(稿末の補注1で、ドンナ・アンナがドン・オッターヴィオに対して取る態度が冷たくなっていくことを示す)。

この解釈を支持する演出として、後で紹介する2011年のミラノ・スカラ座での上演がある。この上演では、冒頭で、ドン・ジョヴァンニとドンナ・アンナがベッド上で争うように揉み合っていたあと、騎士長が現れる気配がするのでドンナ・アンナは立ち去ろうとするのだが、その直前、ドンナ・アンナが自分からドン・ジョヴァンニに抱きついていくという演出が

なされている。また、2014年のザルツブルク音楽祭での公演では、オペラが始まってすぐの場面、騎士長とドン・ジョヴァンニの闘いの際、アンナが止めようとして間に入ったが、彼女がドン・ジョヴァンニの剣をつかんだところで、父を刺してしまう。この演出は、ドンナ・アンナは誤って父を刺してしまったと解するのが普通だろうが、意図的に父を殺したという解釈も可能である。これらのように解釈するならば、ドンナ・アンナはドン・ジョヴァンニと結婚するためにドン・オッターヴィオとの婚約を逃れたいと考えていると解釈することが可能であろう。

6-2 ドン・ジョヴァンニが地獄落ちのあと再登場する演出には次のものがある。

その一つは、1991年にチェコのプラハで上演されたもので、オペラの最後、残りの出演者たちが歌っている場面で、ドン・ジョヴァンニは、引きずり込まれた舞台のセリから再度上がってくる。そして、そこに落ちていくリング(リングは生の象徴である)を拾って、それを嚙りながら、舞台奥の扉に入っていく。この扉は、オペラ冒頭の序曲の場面でドン・ジョヴァンニが登場してきた扉である。その時にもドン・ジョヴァンニはリングを持っていた。ドン・ジョヴァンニが再登場した時、他の人物たちはドン・ジョヴァンニが現れたことに気付いていないことになっている。

1991年12月1日、プラハ、Stavovske 劇場

指揮：Charles Mackerras

演出：David Radok

ドン・ジョヴァンニ：Andrei Bestchastny

レポレロ：Ludek Vele

ドンナ・アンナ：Nadezdha Petrenko

騎士長：Dalibor Jedlicka

ドン・オッターヴィオ：Vladimir Dolezal

ドンナ・エルヴィーラ：Jirina Markova

ツェルリーナ：Alice Randova

マゼット：Zdenek Harvanek

合唱：プラハ国立劇場合唱団

管弦楽：プラハ国立劇場管弦楽団

同様の演出は、2011年12月のミラノ・スカラ座での上演にも見られる（指揮はダニエル・バレンボイム、演出はロバート・カーセン）。この演出では、最後の場面で、ドン・ジョヴァンニは、地獄に引きずり込まれた後、残りの皆が、悪人は報いを受けたと歌っている時に、舞台の奥から不敵な態度でタバコを吸いながら登場してくる。この演出でも、他の人物はドン・ジョヴァンニの登場に気付かない。

2011年12月7日、ミラノ・スカラ座

指揮：Daniel Barenboim

演出：Robert Carsen

ドン・ジョヴァンニ：Peter Mattei

レボレロ：Bryn Terfel

ドンナ・アンナ：Anna Netrebko

騎士長：Kwangchul Youn

ドン・オッターヴィオ：Giuseppe Filianoti

ドンナ・エルヴィーラ：Barbara Frittoli

ツェルリーナ：Anna Prohaska

マゼット：Stefan Kocan

合唱：ミラノ・スカラ座合唱団

管弦楽：ミラノ・スカラ座管弦楽団

ドン・ジョヴァンニが再登場する演出は、2014年にザルツブルク音楽祭

で上演された公演でも見られる。この演出では、最後の場面でドン・ジョヴァンニは、地下に引き込まれずに、舞台前面に倒れる。一同の歌の最後の方で、ドン・ジョヴァンニは立ち上がり、一同に順に触れながら(触れられた方は気が付かないという設定である)、舞台後方を通りかかった女性を見つけて追いかけていく。

2014年8月、ザルツブルク音楽祭

指揮：Christoph Eschenbach

演出：Sven-Eric Bechtolf

ドン・ジョヴァンニ：Ildebrando D'Arcangelo

レポレロ：Luca Pisaroni

ドンナ・アンナ：Lenneke Ruiten

騎士長：Tomasz Konieczny

ドン・オッターヴィオ：Andrew Staples

ドンナ・エルヴィーラ：Anett Fritsch

ツェルリーナ：Valentina Nafornta

マゼット：Alessio Arduini

合唱：ウィーン・フィルハーモニー合唱団

管弦楽：ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

第2部 「ドン・ジョヴァンニ」の、種々の権力関係による演出

ドン・ジョヴァンニは、相手が女性である限り、誰であっても全く関係なく放蕩行為に及ぶが、平民階級の娘に対しては、騎士という自分の地位がもっている力を利用して欲望を満たそうとすることがある。農民の娘ツェルリーナを狙う場合がそれである。

ここでは、現代の社会において、自らの地位を利用して性的欲望を満た

そうとすることが可能な権力関係の例をいくつか挙げて、それらの場合に「ドン・ジョヴァンニ」が如何なる物語として展開するか、どのような演出が可能であるか、を考察してみる。

そのような例として、1 男性管理職と非正規女性社員、2 テレビ局プロデューサーと新人女性歌手、3 政権党の一員の議員と駆け出しの女性新聞記者、4 女性上司と男性部下、5 米軍基地兵士と県民女性、6 かつての戦勝国と敗戦国を擬人化した存在の間の権力関係、について考える。

1 男性管理職と非正規女性社員

まず、管理職の男性が非正規社員の女性に対してセクシャル・ハラスメントをおこなうという場合がある。次のような話の展開が考えられる。

管理職のドン・ジョヴァンニはプレイボーイとして悪名高い。ある日、部下のドンナ・アンナを誘惑したが、その後部屋から出てきた時に彼女の父(創業者会長)が登場し、諍いとなったあと、ドン・ジョヴァンニは父を殺してしまう。ドンナ・アンナは婚約者のドン・オッターヴィオに復讐を誓わせる。(彼は、いずれ社長になることを期待されているが、その力量があるかどうか、一部の人たちからは不安が持たれている。)

別の女性社員ドンナ・エルヴィーラは以前、ドン・ジョヴァンニに誘惑され、捨てられたが、彼は今も自分のことを愛しているはずだという気持ちを捨てきれず、ことあるごとにドン・ジョヴァンニに付きまとう。

ドン・ジョヴァンニは、誘惑の相手として非正規社員のツェルリーナを狙う。正社員になることを望んでいるツェルリーナは、ドン・ジョヴァンニの誘いに乗ったら正社員の道が開けるかもしれないと考える。ツェルリーナの恋人マゼットは、ツェルリーナには危険なことをしないでほしいと思っているが、彼女は、非正規社員は正社員に比べてあまりにも待遇が悪いので、正社員になりたいという気持ちが強い。

オペラの最後で、ドン・ジョヴァンニは、セクシャル・ハラスメントに厳しくなった世論に指弾され、ドンナ・アンナの叔父である社長によって

解雇され、物語が終わる。

ドン・ジョヴァンニ	管理職
レポレロ	秘書
ドンナ・アンナ	部下の女性社員(創業者会長の娘)
騎士長	アンナの父(創業者会長)
ドン・オッターヴィオ	アンナの同僚で婚約者
ドンナ・エルヴィーラ	別の女性社員
ツェルリーナ	非正規社員
マゼット	ツェルリーナの恋人

2 テレビ局プロデューサーと新人女性歌手

次は、芸能界において大きな力を持っていると言われるテレビ局プロデューサーが、有名になることを夢見ている新人歌手に魔の手を伸ばす場合である。

ドン・ジョヴァンニはプロデューサー。女優のドンナ・アンナを誘惑するが、彼女の父はテレビ局の幹部である。彼は娘アンナのことでドン・ジョヴァンニと争いになり、ドン・ジョヴァンニによって殺されてしまう。ドンナ・アンナの婚約者ドン・オッターヴィオは若手のプロデューサーであるが、ドンナ・アンナから父殺しの復讐を誓わせられる。

ドンナ・エルヴィーラは、かつてドン・ジョヴァンニに眼をかけられたことで名前が売れるようになった歌手だが、その後捨てられた。しかし、最近落ち目になってきたので、もう一度ドン・ジョヴァンニの力にすがろうとして、ドン・ジョヴァンニを追いかけている。

ドン・ジョヴァンニは、新人歌手ツェルリーナを誘惑する。ツェルリーナは取り立ててもらえるかもしれないという期待をもって誘いに乗りかける。彼女の恋人マゼットもこの業界の一員で、数多くの新人女性歌手がドン・ジョヴァンニの魔の手にかかっては捨てられてきたことを見て来たの

で、ツェルリーナに意見しようとしている。

最後、プロデューサー・ドン・ジョヴァンニは、彼の放蕩行為の噂が会社の評判を下げると考えたテレビ局上層部によって失脚させられる。

ドン・ジョヴァンニ	テレビ局プロデューサー
レポレロ	ドン・ジョヴァンニの秘書
ドンナ・アンナ	女優
騎士長	テレビ局幹部
ドン・オッターヴィオ	若手のプロデューサーで、ドンナ・アンナの婚約者
ドンナ・エルヴィーラ	歌手
ツェルリーナ	新人歌手
マゼット	新人歌手

3 政権党の一員の議員と駆け出しの女性新聞記者

議員は国民による投票によって選出されるが、それは、政治的決定に関与することを一定期間委託されたに過ぎないのであって、決して全権を与えられたわけではない。しかし、それにもかかわらず、少なからぬ議員が、一旦選ばれたあとは自分に絶大な権力があると思い込んでいる。ここでは、ドン・ジョヴァンニは政権党の一員で、党首脳部とのつながりも強い議員で、その立場を利用して女性へのセクハラを繰り返すことで悪名高かったという筋立てである。オペラ冒頭でドン・ジョヴァンニは、新人議員ドン・オッターヴィオの妻であるドンナ・アンナを誘惑する。アンナの父は党の長老である。自分の妻を誘惑されたドン・オッターヴィオは、ドン・ジョヴァンニに対して復讐の気持ちをいだく。

ドン・ジョヴァンニはかつて地元の選挙区でドンナ・エルヴィーラを愛人にしていたが、その後捨てた。しかし、ドンナ・エルヴィーラは、捨てられた今もドン・ジョヴァンニを愛していて、ことあるごとにドン・ジョ

ヴァンニに近づいて縋りを戻したいと考えている。

ドン・ジョヴァンニは、記者会見の場で見つけた新人の女性新聞記者ツェルリーナに目を付ける。ツェルリーナは内部情報を得ようとしてドン・ジョヴァンニに近づき、危うく餌食になりかける。彼女の恋人であるマゼットも新聞記者であるが、今までにも多くの若い女性記者がドン・ジョヴァンニの犠牲になってきたことをよく知っているの、ツェルリーナがドン・ジョヴァンニに近づこうとするのを止めようとしている。マゼットは、ドン・ジョヴァンニを初めとする議員の横暴さに憤りを感じている。

最後の場面は選挙の投票日である。ドン・ジョヴァンニは、数々のセクハラ被害者からの訴えが表立ったこともあり、理性的に判断する有権者の投票の結果、落選する。

ドン・ジョヴァンニ	政権党の一員の議員
レポレロ	秘書
ドンナ・アンナ	ドン・オッターヴィオの妻
騎士長	ドンナ・アンナの父、党の長老
ドン・オッターヴィオ	新人議員
ドンナ・エルヴィーラ	ドン・ジョヴァンニのかつての愛人
ツェルリーナ	駆け出しの女性新聞記者
マゼット	ツェルリーナの恋人、新聞記者

4 女性上司と男性部下

性に関わる犯罪や不法行為において、いつも、加害者が男性、被害者が女性、と決めてかかることは適切ではない。このことは、日本では2017年の刑法改正においても確認され、それまでの強姦罪は強制性交等の罪とされ、女性が加害者で男性が被害者の場合も犯罪になることとなった(同性間でも同様)。

ドンナ・ジョヴァンナは外資系企業に勤務する女性社員であるが、恋愛対象として部下の男性社員漁りをするので有名である。オペラ冒頭では、部下のドン・オッターヴィオを、彼の恋人であるドンナ・アンナを装って誘惑する。その揉め事にオッターヴィオの父(重役)が出てきて、ジョヴァンナと口論の結果、騎士長(重役)は殺される。ドンナ・アンナは自分の夫を誘惑したドンナ・ジョヴァンナに対して激しい怒りの気持ちをもつ。

ドン・エルヴィーロは、ジョヴァンナが別の会社に勤めていた時の後輩社員であったが、一夜の関係があっただけなのに、今もジョヴァンナを追いかけている若者である。

中間部で、ジョヴァンナは新入社員であるマゼットを誘惑する。マゼットは出世欲があるので、ジョヴァンナの誘いに乗りかけるが、恋人ツェルリーナの懇願によって、かろうじて思いとどまる。

最後、ドンナ・ジョヴァンナは悪行の数々が発覚した。女性の力量を評価して出世させたことが裏目に出て、そのことがむしろ会社のイメージを壊すと考えた社のトップの男たちはドンナ・ジョヴァンナを解雇する。

ドンナ・ジョヴァンナ	女性上司
レポレラ	女性秘書
ドンナ・アンナ	オッターヴィオの恋人
騎士長	重役
ドン・オッターヴィオ	ジョヴァンナの部下、彼の父(騎士長)は重役
ドン・エルヴィーロ	他社の男性社員
マゼット	新入社員
ツェルリーナ	マゼットの恋人

5 米軍基地兵士と県民女性

ドン・ジョヴァンニが地獄落ちしたあとと再登場する、という演出に属する例を考える。

舞台は沖縄、時代は現代。ドン・ジョヴァンニは米軍兵士、オペラ冒頭で誘惑されるドンナ・アンナの父は地方裁判所長。ドン・オッターヴィオは裁判所の下級職員でドンナ・アンナの婚約者である。ドンナ・エルヴィーラは基地外に住むアメリカ人女性だが、ドン・ジョヴァンニとかつて恋愛関係にあった。今ではドン・ジョヴァンニは彼女の何を何とも思っていないが、ドンナ・エルヴィーラの方はドン・ジョヴァンニを忘れられず、彼に近づこうとする。ツェルリーナは10代の日本人女性である。

沖縄では米軍基地の兵士が県民に対して犯罪行為を犯すことが少なくない。このオペラの主人公ドン・ジョヴァンニもその一人で、休日に街へ出かけた際、県民女性ツェルリーナに乱暴を働き、強制性交等の容疑で逮捕された。通常は日米地位協定によって捜査権は米国側にあるが、この事件はマスメディアが大きく取り上げて県民の激しい怒りを呼び起こしたので、米側は特例として日本側に捜査と裁判を認めた。裁判はアンナの父が担当して、ドン・ジョヴァンニに有罪判決(懲役刑)を下すが、その後、ドン・ジョヴァンニは、収監される前に、米軍によって米本国へ帰還させられた。

ドン・ジョヴァンニ	米軍兵士
レポレロ	ドン・ジョヴァンニの後輩
ドンナ・アンナ	裁判所長の娘
騎士長	地方裁判所長
ドン・オッターヴィオ	ドンナ・アンナの婚約者で、裁判所の下級職員
ドンナ・エルヴィーラ	基地外に住むアメリカ人女性
ツェルリーナ	10代の日本人女性
マゼット	ツェルリーナの恋人

6 かつての戦勝国と敗戦国を擬人化した存在の力関係

ドン・ジョヴァンニはかつての戦勝国を擬人化した存在とする。現在も世界最強の国家であり、世界中の国々に対して自国優先の立場をとり、自

国の利益のためには他国の紛争に介入することをも繰り返してきた。オペラ冒頭では、イスラムの信仰を持つドンナ・アンナを勢力下に置いてその有する資産(地下資源)を強引に奪い取ろうとした。そして、そのことによって、これまでドンナ・アンナに対して影響力を持ってきた北の強国という別名を持つ騎士長と争いになった。ドンナ・アンナには友好関係にあるドン・オッターヴィオがいるが、ドン・オッターヴィオはドン・ジョヴァンニのやり方に対し激しい怒りの気持ちを持ち復讐を誓った。

ドンナ・エルヴィーラはドン・ジョヴァンニの隣に住む女性で、カナダという愛称をもっている。従来、ドン・ジョヴァンニと交際していたが、最近ではドン・ジョヴァンニは彼女のことを気になくなり関係が冷えている。ドンナ・エルヴィーラはドン・ジョヴァンニとの関係を再度強めようとしている。

ツェルリーナはかつての敗戦国で、その時の主要な敵はドン・ジョヴァンニであった。しかし、戦後はドン・ジョヴァンニと友好な関係、見方によっては従属的な関係、を続けてきた。ドン・ジョヴァンニは戦後、ツェルリーナに対して、保護を与えるという約束を与え常に強い立場を維持してきた。ツェルリーナは、その見返りであるかのように、ドン・ジョヴァンニに対し、思いやりをもって金品を貢いできた。その行動に助言を与える恋人や友人(マゼット)がツェルリーナにはいない。

最後の場面でドン・ジョヴァンニは、ドンナ・アンナへの陵辱的な行動に対して深い憤りを持っていたドン・オッターヴィオによって、自宅に持っていた自身のプライドの象徴とも言える自慢のツインタワーを攻撃され破壊された。ドン・ジョヴァンニはいまだかつて、他人を攻撃することはあっても、自分が攻撃されることは一度もなかった。それゆえ、今回攻撃を受けたことはドン・ジョヴァンニにとっては、その存在自体を否定されるような驚天動地の大事件であった。

ドン・ジョヴァンニ かつての戦勝国

レポレロ	ドン・ジョヴァンニの近隣の年少の友人
ドンナ・アンナ	イスラムの女性
騎士長	ドンナ・アンナの後見人
ドン・オッターヴィオ	ドンナ・アンナの友人
ドンナ・エルヴィーラ	ドン・ジョヴァンニの隣人の女性
ツェルリーナ	かつての敗戦国

おわりに

本稿はモーツァルトの「ドン・ジョヴァンニ」を手がかりとして、その様々な演出を考えることによって、現代社会の幾つかの権力関係を概観してきた。

そのような関係として次のものを見て来た。

- 男性管理職と非正規女性社員
- テレビ局プロデューサーと新人女性歌手
- 政権党の一員の議員と駆け出しの女性新聞記者
- 女性上司と男性部下
- 米軍基地兵士と県民女性
- かつての戦勝国と敗戦国を擬人化した存在の間の権力関係

それらの各々において加害側と被害側の力関係は様々であり、制度的な上下関係(指揮権限の関係)が存在する場合と、存在しない場合とがある。例えば、会社における上司と部下の間には制度的に指揮命令関係が存在しているが、他方、議員と新聞記者の間などには、そのような制度的な上下関係はなく、力関係は事実上、存在していると言える。

また、沖縄の基地に所属する米軍兵士と沖縄県民の間には、直接には権力の関係はないが、少し違う角度から俯瞰的に見てみるならば、日米地位

協定という制度がもたらす大きな権力関係が、米軍兵士には有利に働き、被害者側には泣き寝入りせざるを得なくさせている。

このように様々な加害、被害事象が存在するが、それらの解決を図ろうとするならば、それぞれ異なった手段を取る必要がある。

補注1：ドンナ・アンナのドン・オッターヴィオに対する心理

「ドン・ジョヴァンニ」は、登場人物の何人かが、本当は一体何を考えているのかが分からない謎の人物であることも、魅力の一つである。そのような人物の一人がドンナ・アンナであり、もう一人がツェルリーナである。

ドンナ・アンナは、通常の解釈では、父親をドン・ジョヴァンニに殺されたことで、それ以降その復讐に生きているものとされているが、それとは別の解釈として、実はドン・ジョヴァンニと恋愛関係にあって、ドン・オッターヴィオと婚約している現状から逃れようとしており、彼に対する気持ちが徐々に冷めていく、という解釈も成り立つ。以下には、そのような解釈を可能にする彼女の台詞等を拾っていく。

第2幕第12場。父が殺されたことを悲しむドンナ・アンナと、彼女を慰めようとするドン・オッターヴィオの間には次のようなやり取りがなされる。ドン・オッターヴィオはドンナ・アンナとの結婚を望んでいるが、ドンナ・アンナはそれを引き延ばそうとしている。

DA(ドンナ・アンナ)：でも、父上は、ああ！

DO(ドン・オッターヴィオ)：従わねばならぬのです、天の意思には。

安心して下さい、いとしい人よ。

あなたが失ったものを、

お望みなら、明日にはやさしく償ってあげましょう、

この心、この手が…

私のやさしい愛によって。

DA：ああ、何をおっしゃるの…

こんなに悲しい時なのに…

DO：何ですって？あなたはお望みなのですか、

またまた引き延ばすことで、私の苦しみを増やすことを？

むごい人だ！

DA：むごい女ですって？—いいえ、いとしい人よ！

私だって本当に辛いのです、長い間私たちの心が待ち望んでいる幸せを、あなたから遠ざけてしまうことは…でも、世間が…ああ…

惑わさないでください、

私の感じやすい心が固く心に決めたことを！

私はあなたを本当に愛しているのです。

おっしゃらないで。いとしい人よ、

私があなたにつれないなどと。

私があなたをどんなに愛していたか(注：amare(愛している)という語の、amai という1人称の遠過去形が使われていることに注目。遠過去形は心理的に遠い過去を表すもの)はよくご存じでしょう。

あなたは私の真心をご存じですね。

鎮めてください、あなたの苦しみを鎮めてください、

苦しんで私が死んでしまうのをお望みでないのなら！

きっといつかは天もまた、

私のことを憐れんでくださるでしょう。

DO：(ひとりで)

ああ、あの人に従おう。

あの人と苦しみをともにするのだ。

あの人のお嘆きも私といっしょなら収まるだろう。

また、第2幕の最後の場で、ドン・ジョヴァンニが地獄に引きずり込ま

れたことを知って、次のやり取りがなされる。ドン・オッターヴィオは結婚することを求め、ドンナ・アンナは1年間待つてほしいと言う。

DO：ああ、いとしい人よ。

今はもう、天が私たちみんなの復讐をしてくれたのですから、
与えてください、私に慰めを与えてください。

これ以上私を悩ませないでください。

DA：ああ、いとしい人よ、もう1年待つてください、
私の心が晴れるまで。

DAとDO：いとしい人の望みには
誠実な愛なら譲らなければいけません。

補注2：ツェルリーナの本心、それを疑っているマゼット

「ドン・ジョヴァンニ」に登場する謎の人物のもう一人はツェルリーナである。

第1幕第16場。ツェルリーナがドン・ジョヴァンニに誘われて付いて行くとしたことで、マゼットはツェルリーナに疑いを持つ。

Z(ツェルリーナ)：マゼット。ちょっと聴いて、マゼット、ねえ。

M(マゼット)：ほくに触るな。

Z：なぜ？

M：なぜって、ほくに聞くのかい？

ひどい女だ。我慢しなきゃならないのかい、
不貞な手で触られるのを？

Z：いいえ、黙って、ひどい人。

あなたからそんな扱いを受けるいわれはないわ！

M：何だって。それでも図々しく言い訳をするのかい？

男といっしょにいたくせに。

ほくを捨てたんだぞ、ほくと結婚するその日にさ。
まじめな田舎者の顔に、こんな侮辱の印を付けるなんて！
ああ、もしこれが、もしこれが恥じゃなかったら…。

Z: でも、もし私に罪がなかったら、あの人に騙されたのだったら、そうだったら、何を心配しているの？
気を鎮めてね、いとしい人。
あの人、指の先にも触らなかったわ。
信じてはくれないの？いやな人。
ここへ来て。何を考えているのか言って。
私をいじめ、何でも好きなようにして。
でも、そうしたら、私のマゼット、そうしたら、仲直りしてね。

この後、ツェルリーナは、自分のことをそんな風に思っているのなら、ぶってくれても良いと歌う。「ぶってよ、マゼット」と呼ばれるこのアリアは聴く者に、ツェルリーナは単に純情な娘ではないのではないかという疑いを抱かせる。

「ぶってよ、マゼット」

ぶって、ぶって、ああ、好きなマゼット、
あなたの可哀相なツェルリーナを。
ここで子羊のように
あなたがぶつのを待っているわ。
髪の毛を引きむしってもいいわ、
眼をくりぬいてもいいわ、
それでも、あなたのいとしい手に
喜んでキスしてあげるわ。

ああ、分かったわ。勇気がないのね。
仲直りしてね、仲直りしてね、ああ、私の命。
楽しく大喜びで、
夜も昼も過ごしたいの。

このアリアを歌ったあと、ドン・ジョヴァンニの声に気付いたツェルリーナは、慌てた様子になる。マゼットがドン・ジョヴァンニに痛めつけられるかもしれないという心配から出たことなのかもしれないが、その様子を見たマゼットはツェルリーナの不貞に対する疑いを増す。

Z：ああ、マゼット、マゼット、声を聞いて、
あの騎士様の！

M：それで、どうしたというんだい？

Z：あの人が来るわ！

M：来ればいいさ。

Z：ああ、ないものかしら、逃げ込む穴でも！

M：何を怖がっているんだい？

どうして青くなるんだ？ああ、分かったぞ、分かったぞ、悪い女め。
おまえは怖がっているんだな、
おまえたちの間で起こったことを知られるのを。

早く、早く、あの男が来る前に、
どこかに隠れよう。
あそこの壁にくぼみがあるぞ…ここに隠れて
そっと、そっとしていよう。

Z：聴いて、聴いて…どこへ行くのよ！

隠れないで、ああ、マゼット。

もしあの人があなを見つけたら、かわいそうな人、
あの人は何をしでかすかあなたには分からないのかわ。

M：あいつがしたいことをさせ、言いたいことを言わせればいいさ。

Z：ああ、何を言ってもだめよ！

M：大きい声を出して、ここにいるんだ！

Z：あなたは何て気まぐれなことを考えているの！

M：(そっと)この娘が操正しいかどうか、ぼくには分かるぞ。

それに、どんな形でこの事件が進んで行くのかも。

Z：(そっと)あのいやな男を、あのひどい男を、
今日は破滅させてやりたいわ。

最後に歌われる「あのいやな男」、「あのひどい男」は、ドン・ジョヴァンニのことと理解されるだろうが、もし、マゼットのことを指しているのだと考えると、ツェルリーナの人物像は全く変わる。

ツェルリーナのそのような人物像は、「薬屋の歌」と呼ばれる次のアリアからも見て取れる。このアリアは、第2幕第6場で、ドン・ジョヴァンニの策略にかかって負傷したマゼットを慰めようとツェルリーナが歌う歌である。

「薬屋の歌」

私あなたを治してあげるわ、いとしい私の許婚。

見ていらっしやい、いとしい人。

あなたが良い子にしていたら、

すばらしいお薬を

あなたにあげるから。

それは自然のもので、
吐き気もしないわ。
それに薬屋さんにも作れないのよ。
それはバルサムのようなもので、
私が持っているの。
あなたにあげることができるのよ、
試してみなければ。
知りたいと思わない、
私の何処にあるのか？
ドキドキしているのが分かるでしょう。
(胸をさわらせる)
私のここを触ってみてね。
(マゼットと退場)

文 献

- 小川賢治, 1999, 日本企業の変容とセクシャル・ハラスメントの将来, 中久郎編『社会学論集 持続と変容』, ナカニシヤ書店
- 沖縄探見社, 2015, 『データで読む沖縄基地負担』, 沖縄探見社
- 金子雅臣, 2006, 『壊れる男たち セクハラはなぜ繰り返されるのか』, 岩波書店
- キルケゴール, S.(浅井真男訳), 2006(原著1920), 『ドン・ジョヴァンニ 音楽的エロスについて』, 白水社
- 笹山尚人, 2012, 『それ, パワハラです 何がアウトで何がセーフか』, 光文社
- 潮見佳男編著, 2017, 『Before/After 民法改正』, 弘文堂
- チャンバイ, A・ホラント, D.(竹内ふみ子他訳), 1988(原著1981), 『モーツァルト ドン・ジョヴァンニ(名作オペラブックス21)』, 音楽之友社
- ハーグマン, N., 1990, 『性の脅威 職場のセクシャル・ハラスメント』, 学陽書房
- 前泊博盛編著, 2013, 『本当は憲法より大切な「日米地位協定入門」』, 創元社
- 孫崎享, 2012, 『戦後史の正体』, 創元社
- 牟田和恵, 2013, 『部長, その恋愛はセクハラです!』, 集英社
- 矢部宏治, 2014, 『日本はなぜ, 「基地」と「原発」を止められないのか』, 集英社
- 社インターナショナル

吉田敏浩, 2010, 『密約 日米地位協定と米兵犯罪』, 毎日新聞社
ク, 2016, 『「日米合同委員会」の研究』, 創元社
Mozart, W. A., 1974, *Don Giovanni* in Full Score, Dover Publications
Newsweek (ニューズウィーク日本版), 2017年12月5日号, [セクハラは#
MeTooで減ぶのか]